

令和7年度 北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和7年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、2～4学年が目標を上回っているが、5・6年生が目標を下回る結果となった。中学年は「漢字を書くこと」にやや課題が、高学年は思考力・判断力・表現力を問う問題に課題が見られた。説明文の内容を読み取ったり、調べたことをもとに文章を書いたりする活動を日常的に取り入れることや、学習した漢字を普段から活用していく習慣を付けること等、低学年のうちから取り組ませていく。
社会	学校全体（5、6年）の社会の正答率は、全ての学年が目標値を下回っている。知識の定着に課題が見られるため、学習後に復習を十分に行い、知識・技能の定着を図っていく。その上で、資料を読み取り活用する力もつけさせたい。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、1～5学年が目標値を少し上回ったが、6学年は下回った。既習事項の確実な定着を図り、基礎・基本の力を培っていくと共に、基礎・基本を活用して考える問題にも積極的に取り組ませていく。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が目標値と同等か、もしくはそれを下回っている。各学年において、基礎・基本の定着を図りつつ、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。
外国語	外国語の正答率は、目標値よりわずかが下回っている。「アルファベットの書き」に苦手意識をもつ児童が増えている傾向にあるため、英語を書く活動を意識的に取り入れ、慣れ親しめるよう授業の改善を行っていく。

本校の教育目標
◎よく考える子
○体をきたえる子
○思いやりのある子
○最後までやりぬく子

本校が児童に育成したい力
・生きて働く「知識及び技能」の習得 ・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成 ・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養
校内における学力向上推進体制
学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

学力向上にかかわる経営方針
「学校は勉強をするところ 集団生活（社会性）を学ぶところ」 ・子どもが達成感と満足感を感じ、挑戦しようとする意欲をもつ学校づくりを推進 「確かな学力の定着」 ・少人数習熟度別指導、個に応じた指導・補充学習・家庭学習・校内研究

本校の授業改善に向けた視点				
指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・WEBQ－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携 ・算数科少人数習熟度別指導（3～6年）による確かな学力の定着	・国語科における、言語活動（話す・聞く）を充実させるための工夫を通し、児童の主体性を育むことを目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観－ブロック会での事後検討を通して－ ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月1回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案（6年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率は、区の平均正答率を下回る結果となった。学年の内容別正答率を見ると、「言葉の学習」「説明文の内容を読み取る」「文章を書く」が顕著な課題となった。児童の課題となる学習内容を授業で積極的に取り入れていく必要がある。	単語や語句を覚えるだけでなく、意味や使い方を理解し、実際に活用できる能力を養う。そのために物語文や説明文を読みながら、新出の語句の意味を推測し、辞書で確認する活動を取り入れる。また、説明文の読み取りでは、段落ごとの要点を把握させたり、接続詞に着目させたりして文章の構造を把握する能力を培っていく。さらに、150字作文を書く機会を設け、一度書いた文章を、より分かりやすく、より効果的にするために推敲・修正する活動を取り入れていく。	国語の授業だけでなく、他教科においても文章を書く活動を積極的に取り入れたり、文の構造を意識しながら言語活動に取り組んだりしていく。また、北コンのEライブラリやスタディサプリ、マイアセスなどのコンテンツを活用していく。
社会	全体の平均正答率は、区の平均正答率を若干下回る結果となった。特に「日本の農業」「日本の国土と人々のくらし」は区の平均正答率より約10ポイント下回っており、大きな課題といえる。児童が「社会の言葉」の意味を理解していないこと、資料を適切に読み取れていないことが原因と考えられる。	教科書にある写真や資料、動画などの言葉に対応する視覚的な情報を豊富に活用して、言葉と意味を視覚的に結びつけるようにする。また、体験的活動をもとにして、各自がもった課題や解決案、学んで思ったことなどをまとめ方を工夫させ、自身の考えをまとめたり整理させる。	実際に体験できないような学習については、教科書だけでなく、ICT機器、北コン等を積極的に活用していく。資料は、教科書だけでなく、資料集や動画教材等、児童自身に選択させ、どの資料からどんなことがわかったのか、根拠をもって説明できるよう児童同士で交流させたり、全体で発表させたりする。
算数	全体の平均正答率は、全ての内容で区の平均正答率を下回る結果となった。特に「分数の計算」は約10ポイント下回り、顕著な課題となった。最小公倍数や最大公約数の理解、約分・通分の習得が不十分であることが課題と考えられる。	児童が関心・意欲をもって学習に取り組めるよう、具体物や視覚的なモデルを用いたり、日常の中から問題を設定するなど、導入の工夫を行う。また、習熟度別学習において、じっくりと取り組む必要のある児童が入るクラスは最低人数での実施を心がけ、手厚く支援していく。計算方法を教えるだけでなく、「なぜこの計算で答えが出るのか」という理由を児童自身に説明させることで、より深い理解を促す。	学習内容の理解が深まるよう、家庭学習に既習事項を取り入れたドリルに取り組みせたり、ICT端末を活用し、たくさん問題を解くことで、定着させていく。個別支援が必要な児童には、パワーアップ講師の力を借りるなどして課題を解決し学習に主体的に参加できるようにする。さらに一人一人の課題が明確に表れるICT端末のアプリを利用して、個々の課題解決を図っていく。
理科	全体の平均正答率は、区の平均正答率を3.4ポイント下回る結果となった。「物のとけ方」は約10ポイント、「けんび鏡の使い方」は20ポイント以上下回っている。語句や実験方法の理解が不十分だと考えられる。身の回りの物から、興味や疑問を抱かせるような指導の工夫を行っていく。また、実験や観察を通して、実感しながら理解することで、学力の定着を図っていく。	実験結果を正しく理解するために、理科支援員と連携し、予備実験を行ったり事前準備を周到にしたりする。また、実物や写真・図・イラスト、動画等を活用したり、実験の具体的な操作を練習したりしていく。実験記録を正確に記録させる習慣を付け、実験結果から「何がわかったか」「なぜそうなるのか」を考えさせ、自分の言葉で考えさせる。	ICT機器を活用し、写真として記録を残すことで、いつでも振り返れるようにするなど、児童の学習を補助できるようにする。また、学習内容を実生活につなげられるように、身近な内容を取り上げていく。小テストを行い、学習内容の定着を図る。